園十郎
家狂言
歌舞伎十八番
下
久保田彦作編輯
紅英堂板

○市川團十郎歌舞伎十八番下の卷目錄

○勸進帳　○助六の續　○象引　○鎌髭
○毛抜　○關羽　○解脫　○押戻
○蛇柳　○嫦　○不動　○外郎賣

右狂言筋書差繪考へと記載致候間筋書等漏をたるゝ拾遺ゑ委敷記載仕候

明治十六年二月

編者　敬白

板元

○勸進帳

○役人替名の次第

一武藏坊辨慶　市川團十郎
一戸樫の左衞門　市川左團次
一常陸坊海尊　市川九藏
一伊勢の三郎　市川權十郎
一亀井の六郎　市川小團次
一駿河の次郎　尾上松助
一軍兵　市川團右衞門
一同　中村つる藏
一同　中村荒次郎
一源の義經　尾上菊五郎
一　長歌囃子連中

本ぶたい一面置ぶたい向ふ松のふすま左右若竹の書起ー

正面常足の段毛せんと掛け有り日覆あり破風の摺込の天幕上の方切戸口下の方揚幕總て本行好みの通り飾り附宜く片シヤギリゑて幕あくト頭取出て歌舞伎十八番の内勸進帳相勤先舛るとよろしく口上あつて役人觸とよみろの爲口上左やうと上手へはへる此内長歌はやし連中上下ゑて出來り段の上へならぶ尤も囃子連中ハ烏帽子素袍なゑ笛のゆしゝひゑ成ゑ下手ゑ(左團次)富樫の左衞門ゑて梨子折烏帽子素袍ゑて出で來る跡より團右衞門鶴藏荒次郎軍兵ゑて附そい出て來り(左團次)いゝゑもの共あるゝ(軍兵三人)れんまへゑひゑ(左)加樣ゑヤすものハ加賀の國の住人富樫の左衞門にてい扨も頼朝義經仮中不和とありたまふゑ依ゑ判官どの主從作り山伏となり陸奥へ下向のよー鎌倉殿ゑてー召及バを國々ゑ新關を立て山伏とゝさく詮議申せとの嚴命ゑよつて某ー此關と相守るかたゝ左樣心得て能らう(だん右)ハッ仰せのごとく此程も怪ーげある山伏を捕へさやう木ゑ掛並べ置ゑしてござり舛る

（鶴）隨分者よ心得我々浄跡ゐひかへ若ー山伏と見あらば
ば前へ引ぞろやすべー（荒次郎）修驗者さるもの來りあば
即座よ繩掛討とるやう（團右）いづをゐ警固（三人）致し舛
てござり舛る（左）いーくも各々やされたり猶も山伏來り
なば謀でとと以て捕子となし鎌倉殿の御心安んぞやそべ
ーかた〳〵此儀急度番頭仕つれ（三人）かーこまつてい
ト皆々上の方へよろーく住ふと次第よあり うさひ「旅の
衣いすゞかけの〳〵露けき袖やーやるらん 唄「時ーも頃
い如月の〳〵十日の夜月の都を立出てト三絃入大小寄せ
よなり向ふより（菊五郎）義經强力好みのこーらへ笈と背
負網代笠金剛杖と持出で來りよろしく花道へ留る 唄「是
やこの行も歸るも別をくい知るも知らぬも逢坂の山隱す
霞ぞ春いゆかーける 波路はるゝよ行船の海津の浦よ着よ
けりト向ふより（九藏、權十郎、小團次、松助）いづれも山
伏の揃へよく兜巾篠掛小さ刀珠數をもち出て來る跡よ
り（團十郎）辨慶好みの拵へ珠數をもち出で來り文句

いづをいゐよろーく花道よ留るコイヤイよ成り
（菊五郎）いかよ辨慶道〳〵もやす如く行先〳〵よ關所あ
つていい所詮陸奥まぞいい思ひもよらず名もなき者の手よ懸
らんよりいと覺期を得よ極めたり去ながら各々の心もだ
し難く辨慶が詞よしたがひ强力とは姿を替たり面々はう
らふ旨ありやト常陸坊海尊の（九藏）されば帯せー太刀
いなんの爲いつの時よか血をぬらん君浄大事の今此時伊
勢の三郎の（權十郎）一身の腑を固め關所れ番卒切たはー
關を破つて越るべし龜井の六郎の（小團次）多年の武恩と
今日只今駿河の次郎の（松助）夫よそ望むところなきいで
や關所を（四人）ふみ破らんト立懸ると留て（團）ヤアレ暫
く待しへ先ほどもやでとく是いゆゝしきは大事よくい
此關一ッ踏やぶつく越たとも行先〳〵の新關よかゝる
沙汰のある時い事を求めて破るの道理たやすくは陸奥の
恭りかたー夫ゆゑよこそ兜巾篠掛と去りぞけられ笈をは
肩よまゐらせ君を强力よ仕立い兎よも角よも某しゐは任

せあつて浄いたまーくいしへどもは笠を深〳〵と召れ何
樣よも草臥さる浄休よて我々より跡よ引さがつては通り
いヨバなの〳〵人い思ひもよりやすまゐ遥う跡よと浄山
わらふずるよていい（菊）兎もくも辨慶よゐ計らひいへ
各〳〵違背をべうらず（四人）かしこまつてござり舛る
（團）然らば皆〳〵浄通りいへ（四人）心得てござる 唄「いざ
通らんと旅衣關のこなたよ立懸るト是よて誂へのほられ
音よなり皆〳〵本舞臺へ來る（團）いかよやい是ある山伏
のは關と詭り通るト是あて軍兵三人こなーあつて（三人）
ナニ山伏の此關よかゝりーとや（左）何と山伏のは通とあ
ると中か心得くある○ト立て來り團十郎よ向ひ○あふ
〳〵客僧達これい關よていい（團）うけたまわりい是い南都
東大寺建立のために國々へ客僧を遣いさる北陸道を此客
僧うゝたまわとく詭り通る（左）近項殊勝よいいへども此
新關い山伏たるものよ限り堅く通路ありかたー（團）心得
ぬ事どもかなシテ共趣意い（左）さん候賴朝義經浄中不和

よならせたまふよ依り判官殿い陸奥秀衡を賴とさまい
作り山伏とあり下向あるよー聞ーめー分られ國々へ斯の
如く新關を立られ斯けいで致ー某ー承たまわる（だん右）
山伏と詮議せよとの事よてヨれ〳〵番頭つかまつる（鶴）
殊よ見れば大勢の山伏達（荒）一人も通ー申すこと（三人）
まゐりならぬ（團）いさい承たまわりい夫い作り山伏をて
そ留めよと仰なるべー誠れ山伏をとゞめよとの仰せよて
いよも有まゐ（だん右）イヤ昨日も山伏を三人まで切さる
上と（鶴）まことの山伏迎川捨いなー（荒）たつて通れば一
命よも（三人）及ぶべー（團）扨い切さる山伏首い判官どの
ゝ（左）アラむづのしや問答無益一人も通すこと（三人）詭、
りあらぬト上の方へ來り左團次かつら桶に掛り居る（團）
言語同斷かな不祥あるべきや此上い力反べず勘念の爲さ
らば最期の勤めをなさん尋常よ誅せらるゝうずるよて 候
各々近ふ渡りいへ（四人）心得てござる（團）イデ〳〵最期
の勤をゐさん 唄「夫山伏といつば役の優婆塞の行義を受

即心即佛れ本体を愛よて打置たまいんこと明王の照覽と
かりがさふ熊野權現のは罰あたらんこと立どころよ於て
疑がひあるべからず晩あびらうんけんと珠數さらく〳〵と
押もんだまト此内のつとよて國十郎眞中よ左右へ二人宛、
別れ祈まようーくある左團次思入あつて（左）ハ、近頃殊
勝の浮變期あてい先よ承たまわれバ南都東大寺の勧進と
あふせあまーが定めて勧進帳の浮所持なき事いあら玄勧
進帳を遊ばされいへこれよて聽聞仕らん（團）なんと勧進
帳を讀めとや（左）いかにもト國十郎思入あつて（團）心
得申しているい○唄「元より勧進帳のあれバこそ笈れ内より
往來の巻物一巻取りいだし勧進帳と名附つ、高らゐよこ
そ讀み上けまト笈の中より誂らへの一巻をいだーー押ひら
き○謠ひ夫つらく〳〵思ん見れば○ト左團次立上り勧進帳
を差のぞく團十郎見せおふと正面をむき急度思入○大恩教
主の秋の月いねとんの雲よ隱れ生死長夜の長だ夢驚かす
べだ人もるーー笈ゐ中頃の帝聖武皇帝と申奉つり是ゆの婦

人よわりれ戀慕れ情やみがたく涙泣たなんだのわく時な
ーのるがもゐよおやうぐ菩提のため慮遮那佛と建立した
まふ然るよ往時壽永の頃燒亡しをわんぬのはどの禮場絶
なんことを歎き俊乘坊澄源勅命を蒙むつて無常のくわん
もんゐ泪を落ーー上下の親族をそゝだて彼靈場を再建せ
んと諸國よ勧進す一紙半錢來財のともがらい現世にてい
無比の樂よはこり當來よてい數千蓮華の上よ座せん歸命
頂禮稽首敬つて白す 唄「天もひゞけと讀あげたり（左）
いうよも勧進帳聽聞の上い疑ひいあるべからず去ながら
ことの傳手ゐ問申さん世に佛徒の姿さよ〳〵あれど中ゐ
山伏いいう然うーきすがたゐて佛門修行いいぶかしゝこ
れよも謂あるやいうよ（團）其由來いとやすし夫修驗の
法といつば台藏金剛の兩部をむねとし嶮山惡所を踏開き
世よ害をおす惡獸毒蛇を退治して現世愛民れ慈愍ゆたれ
或ひい難行苦行の功をつみ惡靈亡魂と成佛得脫させ日
月清明天下平の祈禱を修すうるがゆゐよ内には忍辱慈

悲れ德を收め表い降魔の相を表いし惡鬼外道を威伏せり
これ神佛の兩部よ〳〵百八の珠數よ佛道の利益をあらい
す（左）シテ又袈裟衣を身よまとひ佛徒の形ゐありあがら
頓ゐれたゞく兜巾いかよ（團）則ち兜巾篠懸い武士の甲
冑よひとしく鹿よい彌陀の利劍を帶ーー手よい釋迦の金剛
杖よて大地を突て踏ひらき高山絶所を從横せり（左）本僧
い釋迦杖を携さへるに山伏修驗の金剛杖よ五体をのたむ
る謂をいなんと（團）事もをろのや金剛杖い天竺檀特山の
神人阿羅々仙人の持たまひし靈杖よて胎藏金剛の功德と
籠り釋尊いまだ嬰曇沙彌と申せし時阿羅々仙よ給仕ーて
苦行仕たまひやゝ功積り仙人その信力强勢と感ゐ嬰曇沙
彌をあらた然て恐昔比丘と名づけたり（左）シテ又修驗よ
つたわりーい（團）阿羅々仙より恐普よさづかる金剛杖か
ゝる靈杖おれバ我祖役の行者こをもつて山野を徑歷し
それより世々よ是を傳ふ（左）佛門よありゐがら佩せー
大刀い只物をゝどさん料なるやまこと害せん料なるや

(圖)こゝを奈山子の弓ゑ等しくをゞーゑ佩の料あゝゞ佛法王法の害をゐゝ悪獣毒蛇いいふにをよゞずたゝへ人間あゝゞとて世をさまたげ佛法王法ゑ敵する悪徒い一殺多生の利ゑよつて忽ち切てすつるなり(左)目ゑさへぎり形ちなるものは切りたもふべきが若ー無形の陰鬼陽魔佛法王法に障化をあさゞ何をもつて切りたまふや(圖)無形の陰鬼陽魔い九宗眞言をもつて切断せんゑなんの難き事やあらん(左)シテ山伏の出立い(圖)すないち其身を不動明王の尊容ゐのたゞるあり(左)ゥーらゑ頂く呪中いいかゑ(圖)うれゝ五智の寶冠ゐて十二因縁のひだゝとつて是と戴く(左)うけたる袈裟い(圖)九會曼荼羅のかきの篠掛(左)足ゑまゝひーゝゞきいいかゑ(圖)胎藏黒色のはゞきと稱す(左)扨また八ッのわらんずい(圖)八葉の蓮華をふひの心あゝゞ(左)いゞ入る息い(圖)阿呼の二字(左)抑九字の眞言といいかゐる儀ゑや事の次第ゑ問ひゃさんなんとく(圖)九字い大事の深秘ゑーて語りゞたき事なゞ共疑念の晴さんその爲ゑ説ゞ開せゃすべー夫九字の眞言といつばいいゆる綜兵闘者皆陳列在前の九字ゐり正ゑさらんとする時いたゞーく立て歯をたゝくこと三十六度有の大指ゞもつて先づ四縦を畫き後に五横を畫く其時急ゑ如律令と呪するときいわらゆる五陰鬼煩惱鬼ゆつた悪魔外道死靈生靈立どころゐ亡ぶこと霜ゑ熱湯とそゝぐがごとー實ゑ元品の無明を切るの大利劒莫那れつるゞも何ぞーかん武門にとつゝ呪をさらゞ敵ゑ勝事うたゞいなーまだ此外ゑも修驗の道うたゞひわらば尋ねに應ゑて苦へゃさん其德廣大無量ゐり肝ゑゐりつけ人ゑ語るゐあなかーこ〜〇大日本の神祇諸佛菩薩もせうらんわれ百拜稽首おそゝゝくつゝーんでゃすと云ゞ斯の通り唄「かんえんーてゞ見ゐゑける(左)うく尊き客僧と暫時もうゝゞひゑをせーい眼あつてあさがてとー我を念ひて某ー勸進の施主ゑつかんそゝ〜番卒ども布施物もて(軍三人)ハアヒト三人上手へいいる唄「士卒ゞはこぶ廣臺ゑ白綾袴一かさね加賀絹あまた取揃ひ前へこそい直ーけれト此内士卒三人白木の臺へ加賀絹ゞのせ同ゐく白綾袴地とれせ三寶へふくさ包の丸鏡袋入の砂金とれせもち出で左圖次ゑ見せ能きところへ幷べ置き(左)させうにいいへども東大寺建立の勸進則はち布施物受納くださらゞそれがーが功德ひとへゑたのみ奉つる(圖)コハあり難き大旦那現當二世安樂ゞ何のうたがいあるべからず重ねてゃす事ゑいゆ猶我々い近國ゞ勸進ー卯月半ゑのぼるべし夫迄ゞ重高の品〜ゞ預けゃゞ鏡一面砂金一包受納いたす〇いのゑ旁々涉通りあゝゞイデ〜急ぎゃすべー(四人)心得ゃていゆ唄「こゝ嬉ーやゞ山伏もーづ〜立て歩行れけりト圖十郎先ゑ四人付花道へかゝる菊五郎跡より行きゐ掛る此時鶴藏左圖次にさゝやく事宜ーく左圖次思入あつて(左)いゝゑゞ是成强力とまりゆへト是ゑよて皆々きつとこなし(圖)コリャあわて、事を仕そんずな〇唄「すわや我君あやしひるい一期のふちんこゝありと各々立歸るト此内圖十郎ヅカ〜と舞臺へ來り菊五郎ゑ向ひ〇コナ强力めゞ何とて通りをらぬゞ(左)あれいこあたゝより留ゃ(圖)それい何ゆゑゞ留ゞゆゞ(左)ァ、强力ダチ人ゐ似たるとゃ者の候程ゑ扱ころ只今留めたり(圖)あんと人が人ゑ似たりとハ珍ら去ゝらぬ仰せゑこゞ偖誰をゞ似ていゆゞ(左)判官殿ゑ似たるとゃ者いゆゐ落居の間だとゞめゃ(圖)言語同斷判官殿に似たる强力めと一期の思ひ出あゐゝ腹立や日高くい能登の國まで越ふずると思へるゑわづゝの笑一ッ背負ふて跡に下れゞこゞ人も怪去むれ總じて此程よりやゝもすれゞ判官殿よと怪去めちるゝい已れが仕業のはのなきもゐなりゑゝ思ひば憎去や憎み〜イデものー見せん〇唄「金剛杖をたつとつくさん〜ゞに打擲すト圖十郎金剛杖ゑて菊五郎をうつこと宜敷ゐつて〇通りをろふ唄「通れところいのゝ去りぬ(左)いか樣ゑちんずるとも通すこと(三人)罷りあらぬト是ゞて四人立掛るを(圖)こりゃ〇押へる左圖次軍兵だん右衛門つる藏荒次郎も

是をみて立懸る雙方よろゝゝくわつて唄「かたゞゝゝ何ゆゑよかゞど賤ゝき強力を太刀うちなを抜たまふゝ目だれ頭の振舞臆病のいたりうと皆山伏ゝ打刀をぬきかけて勇みかゝれるありさまと如何ある天魔鬼神もおそれつべうそ見へよけるト此内團十郎雙方をとめる事よろゝゝく有てきつと見ゝ○まだ此うへよもゆ疑ひけれゝゝ此強力め荷物の布施もろともよゆ預けゆいかやうとも紀明なされい但しこれよて打殺ーゆさんや(左)コハ先達のあらけなー(團)然らバ只今疑がひありしゝいかに(左)士卒のものがわれへの訴へ(川)ゆ疑念晴ー打殺して見せゆさんや(左)はやまりたまふゆ卒どものよしなきひが目より判官殿よもなき人をうたがへバこゝろ斯く折檻も仕たまふゆり今ゝ疑ひ晴ゆとくゝいざゆひ通られよ(團)大旦那の仰せならずバ打殺ーても捨んもと命冥加よ叶ひーやつ以後をきつと心得わらふ(左)わをゝ是より猶もきびしく警固の役目かたゞゝたれ(三人)ハゝー唄「士卒をひきつれ關守ゝ門の内へぞ入りよけるト左團次先よだん右衛門鶴瀬荒次郎ついて上手へ這入と合方ばだまに成り下の方より團十郎菊五郎の手をとり上坐へ直ゝ敬まふこゆゝある菊五郎も思入わつて(菊)いかよ辨慶扨も今日の氣轉更よ凡慮のなすわざよあらず只天の加護とこそをもへば關のゆのどもわれと怪ゝめず生害限りある期よ兎角の是非をバもんだわづゝてたゞ下人れ如くさんゝよ打て我と助くるこれ辨慶が計らひよあらず弓矢八幡の化詫宣うとをもへバかたゝなくおぼもるぞ(九)この常陸坊をはじめとゝて隨ゞふものども開守よ呼びとめられゝ其時ゝ袋ぞ君の御大事とおもひゝる(樓)まことよ源氏を守る正八幡の義經公をゝもらせたまふゆ印しの顯ゝれし上ゝ陸奥下向ゝをみやうゆるべゝ(小團)まつたくこれゝ武藏坊が智謀よあらずんバまぬがれがたし(松助)なかゝゝ我ゝがをよぶ所にあらずゝゝ(四人)驚ろきいつてござる(團)そゝ世ゝ末世よ及ぶといへども日月いまだ地よ落ち

○象引

該象引といふ狂言正ーく歌舞伎十八番の内よ入れど其始めの年歴等詳らかあらず追て考ふべー故よたゞ故豊國筆の十八番の錦繪の圖をうつしくいだしぬ

「豊芥子十八番考」よ曰く象ずるよ文化年中馬喰町四丁目江崎屋といふもの潜しの丹繪と四五番出版せど尤も新たゆ刷出せーものかあるひゝ古版と摺ーものうゝ知らざれど其中よ團十郎素袍の肌をぬぎ山中平九郎公象悪よて象を引ゆふところゆりてゆ象引の繪う猶たづぬべー云々とゆりて未よまた左の如くーるす

享保十八年漢土より大象と貢す其節象の事を書ーて印刻するもの多ー所謂「象志」「刷象」「同假名草紙」「象の落ーバなー」「象幾六」一枚ずり此如流行せしゆゑ劇場ゆても是形ちゝ作り狂言よつうひしものと見へたり右の象の言葉芥子嶽す云々また次よ

予（豊芥子）識するところの丹繪よ象引あり右よ云江見屋より（江見若しや崎の誤字か）文化年中再板せーものゝ立川焉馬翁の書入ありその書よ此圖ハ江見屋吉右衛門持つたへー古板むかーハ色丹青よ彩りたるあり夫よ延享元甲子年春合せ形色摺をとじめーハ則ち此江見屋が根元といふ是を見るよ元祿十四年巳正月中村座「傾城王昭君」といふ狂言よ山上源内左衛門市川團十郎鈴鹿の皇子山中平九郎とあり是れそふくハ象引ならん歟あわ考ふべー

此頃（天保嘉永年間おるべー）漆畫の奥よ七代目ゞ

聚句あり前書よ曰りものゝ衣裳をとあとて

虫干や兵もものどもが汗の跡　七代目團十郎

○鎌髭

米だ考へず拾遺に委しく載すべー

（以下勧進帳の續き）

たゞ見ずに高運ありがたーくさいハへ計略といやなゞら正ーく主君を打杖のうら恐ろーヲ斤をもわげるそまゞーー腕もーびるゝごとく覺へハアもつさいなやく〳〵唄「つひよ泣ぬ辨慶も一期の涙ぞ殊勝なり判官ゞ手ゞとりたまひト皆々宜敷うれひの思入（菊）いかあをゞ義經ハ弓馬の家ゞ生を來て命ゞ兄頼朝よたてまつり屍を西海の波よーづめ（團）山野海岸よ起ふーわゝす武士の唄「鎧よそひー袖まくふかたーくびまも波の上わるとさと船ようかび風波よ身とまかせゞた或ときハ山脊の馬嘶も見べぬ雪の中よ海すしこわり夕涙の立くる音や須磨明石とかく三とせの程もなくくいさわーやとしはをかゝりー鬼あざミ箱に驚おくばかりなゞト大小入よて團十郎よろーく物語もやうの振あつてをさまる（四人）とくくー退散唄「互ひよ袖をひきつれていざゝせたまひの折柄ゞト團十郎先ゞみなくー立上り行きよりゝる此時下手よりいぜんの（だん右衛門）三寶ゞ土器を乘せ是を持ち（鶴藏、荒次郎）瓢箪の吸筒を持ち出で來る跡より富樫の（左團次）出で來り（左）客僧たちしばしくート是よて皆々入替りよろしく住ふ○扨もそれがし山伏達よ聊爾をやわまりよ面目もなく覺へ鹿酒を一ッ進ぜんと持參せりイデ〳〵盃まゐらせんト土器をとりあげるだん右衛門酌をする左團次呑で團十郎へさす（團）ありがたの大旦那に馳走てうだいつかまつらん唄「寶よくくこれも心得たり人の情の盃を受て心をとゞむとこのやト盃を受けよろーくあつて唄「今い昔玄の語り草あらはづゝしの我こゝろ一度まみねしおゝあさへ迷ひの道の關越くいま又爰に越のぬる人目の關のやるせなやアゝ悟られぬこそ浮世なれト此内團右衛門鶴藏と相手よさかづき事あつてとゞかつら桶の蓋を取り兩人の吸筒の酒をのこらずつぎぐつと飲み酒ゞよつたる思入よて唄「面白や山水よくさかづきを浮べてい流よひゝるゝ曲水の手まづさへぎる袖ふれていざや舞ひと舞とふよト此内大小よてよるーく振あつて三味線入男舞よ成り本行の舞ひゝなるよろしくあつて唄「元より辨慶ハ三塔の遊僧まい延年の時の和歌ト此内ふゞあつて舞の二段目ゝなる唄「これなる山水の落て岩はよひゞくこゝろ鳴るゞ瀧の水くゝト此内ふりあつて舞の三段目にあり唄「鳴ハ瀧の水日ハ照るともたへずとふたりとくくー立やたつゝ弓の心ゆるすゝ關守の人々いとまやしてさらばよと笑をおつゝとり肩ゞ打かけト大小片シヤギリよ成り團十郎振の内よ皆々よ行けといふ思入これよく菊五郎先よ四人付て向ふへ這へる團十郎笑をせおひ金剛杖をもち左團次よ辭儀して立上る唄「虎の尾をふみ毒蛇の口をのがをたる心地ーて陸奥の國へそくだりけるトよろーく團十郎花道へ行舞たいハ左團次だん右衛門鶴藏荒次郎よろしく是を見送る此見得よろしく拍子幕ト打込カケリよ成ゞ團十郎よろーく振て向ふへ這入る跡シヤギリ

○助六

前號のつゞき

助六の（團十郎）舞臺へ來る白酒賣新兵衛の（菊五郎）花道へ腹ばいになる團十郎こゝ有て（團）どいつだこりヤアヤ己を馬鹿よするナ悪くそばいやアがると大溝へ浚ひ込む

ぞ鼻の穴へ屋形船を蹴こむぞあんの事たト舞たいへ來る菊五郎起あがり(菊)モシ〳〵待てくんなさい(團)また呼ヤアがるゥ其處ゥ居ろ逃るあト花道へゆく菊五郎ヲざと震へくねる團十郎傍へもさ○をれをよんだと我か(菊)アイ私でてんす(團)酒蟲た奴だナあんの用がある(菊)わーきてんすよ(團)何だ私だマアうぬがーやッ面を見てやろうト菊五郎が胸倉をとつて頬を見てびつくりする(菊)私しきてんすよ(團)こりや兄おや人祐成どの(菊)お前の目からも祐成どのと見へ舛か(團)ハテ兄おや人を間違へてよい物ゥそふして爰へとてざり舛たぞ(菊)あぜ來たとと可笑や此祐成と此廓へと札留ゥへ(團)イヤ全くそふいふ事でいあいがあんまり思ひ掛おいもへマアどふーてざり舛ゥ(菊)私ーいこなたゥ大溝へさらひ込まれに來まーた口を引さゥれゥ來舛た鼻れ穴へやかた舟を蹴こまれゥ來ました鼻れ穴と右のへ左りゥへお望みーだいサア〳〵〳〵蹴込んで貰ひたいト是といひながら菊五郎舞臺へ來る團十郎始終氣の毒ある思入○コレ下ゥ居やをハテ下ゥ居やをといふゥト是ゥて團十郎下ゥ居る菊五郎こなし有て懷ろより以前の鏡と金をいだし團十郎が前へ置て○添おけのふてざる返しましたぞ(團)モシ〳〵返したとてこりや何でてざり舛る(菊)ハテナア人ゥ物と貸て忘れるとハテよいは身代でエスの(團)アゝうんおらいつぞや(菊)上田の小袖ゥ萌黄のうちをつけて拵らへゥ時すてゥ金が足いで貴樣ゥかりた二分と二百返しまーたヨ(團)イヤ夫ハ他人がまーいのへすのかへさぬのと云事がある物でてざり舛るかマア〳〵是ハそつちへお仕舞おされ舛せト押返す(菊)イヤ〳〵人ゥ物を借て居ていふ事が云れぬアイ口がきゥれぬわいの(團)是ハどふでてざり舛る現在弟のものをこなさまのものハ私ゥもれまた私ゥが物ハこゥ樣のもの(菊)何といわつしやる此方とわゥは兄弟おやといふのか(團)ハテ知れた事兄じや人でてざり舛ト合方ゥなり菊五郎こゥし有て(菊)成程きさまは箱根山で學問をさゥたから能ゥ知っててざらうおいらが樣なものハ何も知らぬゲこゥたハ天下の傍制札を見たで有らうまづ第一が親孝行二ばんゥと弟と兄と敬まひ兄ハ弟を憐めとたれゥも讀ゥる樣ゥ平假名をもつて書てあるゥゥ讀ぬながら夫を守つて弟とゥとれむ心れゥるがいかに役ゥ立ぬ兄おやといふて大溝へさらへこむとと情けない(團)アゝ是々あれハゥあなたと存じませぬゆへの事(菊)そんゥら私と知ずゥ言ッーやれたゥ(團)あなたと知つて堂ーてやませう(菊)コレ暗の夜の礫親れ頬へ當らうも知れぬぞや時致そなたとどふ心得て居る父上の敵が討たいと箱根を下山ゥー母人の勘氣をうけてさへ此祐成と立并んで本望遂たいといふたじやないか鬼王夫婦ゲ情けゥて母人の傍機嫌もなほり今こそ兄弟睦まじふ五月下旬をまつでいないか夫ゥ此程より此廓へ入ヲ込み毎日〳〵喧嘩ばつかりーやるげな先刻もさつきとて人の天窓ゥ温飩をゥけたり下駄をのせたり無法といわふかコレ母人ハそなたの事祐成時致ハどふーたことじや喧嘩ばかり仕をるげなおぜゥ異見をせぬと其方れ事ばつかり竹町で竹割ゥゥたハ誰じや助六馬道で刎倒ーたハたれじや助六じやゥゥゥの事ゥ夫りやア雷門で腐をぬいたハたれじや助六ゥんゥゥレ烏の啼ぬ日ハゥれどそなたの喧嘩の噂を聞ぬ日ハゥゥ私しゲこゝろを推量ゥてくを時致どふして天魔が入かとつてそんな心ゥ成つてくれたぞそなたの身ゥ覺へのある喧嘩でもあらうゲまた其方より強い奴ゲあつて命ゥさゝわることゥらば此兄と云替した十八年れ願ひ仇事ゥまへぬぞや助六モウ此上と兄弟の縁と切つた見下果たといとふゥ兄持たとおもふゥ弟をもつたと思ハぬぞゥんまりじやハ兄の罰ゥやといふて當るまい物ぞもないハ(團)イヤ疊みゥけてのハ異見ハ何ゥや思ふたら喧嘩の事かな此助六がけんくわハゲでします(菊)強いハゲサ親兄弟ゥ歎きとかけ苦勞をさせるけんくわはゲとハ強ハことゥやの(團)モシ〳〵もつたいない何しゥ親兄弟

に苦労を掛る喧嘩をいたーませうぞ此けんくわと孝行よするのでてござり舛る(菊)己よいわれせうことなーよ孝行とゝシテけんくわをすれバ何が孝行じやト是よて圓十郎傍りへ思入ーて(圓)ゑつそや箱根に於て友切丸の紛失祐信さまの沙難儀百日ゞ日のべゐれども今よ於て其行衛が知れませぬゞ兄じや人何ぞ手懸りでもてござり舛さか(菊)サア今よ知れぬもゑ若勞をしてゐるわへ(圓)サ夫ゆゑその友切丸ゞゐい時ハ祐信さまのお命よりゝいる事まつた敵祐經をうつにゝ友切丸にて討よと箱根權現の靈夢ゞふぞ友切丸を詮議仕いだー祐のぶさまのは難儀をバお救ひヤ玄敵祐つねをうたんと千々に心ゝ碎けども夫ぞとゝふ手懸もおし幸ひれもひついたる此喧嘩廓ゝ人の入りこひ所無理にけんくわを仕ゝけ刀を拔ねバゐらぬ樣ふしかけ拔ゝ合せば是かそれかと白刃を握ッて心ゝ盡そ此助六が心どけ樣よあらうと思ふて下さゝ舛るぞ成はど一通りよお聞ゐさを舛てゝお腹立の沙異見もゐゝそふナことじやよ依て兄じや人の志ー有がゝいと存じませうが譯もれきゝゐされずにたゞ一圓よ見下果ゝの兄もつたと思ふナ弟もつたと思ハぬとゝ胴欲おことれつーやり舛たナよふでざゝ舛此樣ゐ千辛萬苦の苦勞いたゝても親兄弟よ不孝にあり舛るならバ此上ハ喧嘩もや先舛るでてござりませふ私ーが喧嘩を止舛たゐら大方早速友切丸もいで祐信樣のは難儀もれ逃ゝ遊ばすでてござりませう親兄弟よ見限られた私ーいつ敵も討れず皆さまへのヤゝけよ坊主にゐゝ舛るれ免ーなされて下されいアゝいやゝの喧嘩今迄のけんくわゝ免させたまへ諸佛薩陀アゝ喧嘩ゝいやゝのくゝト菊五郎是を聞思入ゐつて(菊)イヤ最初から己もそんな事と思つた日頃から發明なゝなた無法なけんくわゝせまい定先て友切丸詮議ゆゝじやと思ふてゐた己がナゼ今の樣ゐことといふたのゝ此口じやトこゐー有て○口よ○ナゼ今の樣なことといふゝ以後ゝ急度た玄なめ誤まつたかくくゐやまゝ舛た○アレくゐやまり舛たといふモウ堪忍ーてやりやれコレ其方がそふいふ志ーならバト菊五郎圓十郎の手を取て引寄やうとする圓十郎ハ下手へ來て(圓)イヤくもふ止舛るお免ーあされ舛せい喧嘩ハいやゝのくゝトあちらと向く(菊)コレサ此方と向きやれ己と玄たことが他人がましい二分二百イヤ歸ーたの返さぬのと氣が逸ッたゝふナゝなたの言る通りろなたが物ハわーが物わしが物ハ矢張己ゞものじや○トいぜんの金と錢ゞーもふ事あつてコレ機嫌なゝ玄やいの(圓)アゝ喧嘩ハいやゝのくゝト後ろと向く(菊)是ハ堂ゐゝ田甫から拜む觀音さまうーろ向きとハ曲がゐいコレ時致そおたゞそふいふ心と知つて今れ樣な愛想盡しをいひませうぞ氣よ當つたら堪忍ーや兄弟なれバこゝ異見もいふあやまつたくあやまつたハやい(圓)左樣あらバ最前かゝゆ舛さ譯をれ聞屆なされて喧嘩と致ーまーても大事てござり舛ぬか(菊)大事ないともくゝ喧嘩を小紋よ染てお先ーあさい(圓)そんなゝ喧嘩と致しまするぞ(菊)さつーやいく前体けんくわハ能お前よ似合てゐるなんおら喧嘩と茶漬ゐしてさらくゝとお上りなさい(圓)いよくけんくわをー舛ぞへ(菊)まいつぞいかへて上りませい(圓)是で落付たわへ(菊)己も落付たわいの時よ友切丸の手懸りでも知をたゝ(圓)いまだ夫ぞとハ知れませぬが最前流体が刀を拔ふと玄て拔兼ましたハ心惡ふてござる(菊)なる程ゐいつが面魂ーひ怪ーい奴もーや尋ねる其刀を帶ーてゐるも計らぎず(圓)夫故今雷ゐいつのやうすを(菊)イヤと今雷ハわーと一所よ歸らツーやれ(圓)エゝまゝ喧嘩の腰を折ッーやるの(菊)おつと誤まつたり去りながら此樣よいふゐそゐたを奚事るのら斯ふーませう今雷ハ私玄も爰よ居てそなたと一所よ詮議の爲けんくわを仕やうでハゐるよいの(圓)其樣な怠惰たことハ(菊)コレくゝ己斗りでハ心元ゐいが北方といふ後立が有ばそゐたのいひやす先精いつばいりきんを見やう(圓)ろんゐら先喧嘩の仕やうハ足が肝腎足とかう踏張く野郎めナゼ突當ッた鼻の穴へ屋形舟と

けこむぞ大どぶへ浚ひ込むぞこりやアまたゐんの事たとかうせねバ先の奴ゞ怖がゞませぬ(菊)成程けんくわのしやうハ逆ッたもれだ此足とまづうふ踏張て野郎めあぜつきあたつた鼻の穴へ屋形舟を蹴込むぞ大どぶへさらひこむぞうかまづ足ハ出來たやうなやト此内菊五郎いろいろ可笑身振あつて(團)コレ〳〵其樣な足でけんくわゞ出來ル物でござり舛ふまづあーゐ斯うふんバつて足と腮との釣合を見てヤイ野郎めなぜ突當つた鼻の穴へ屋形ぶねと蹴込むぞこりやアまた何のこッたといふ調子でなければ成ませぬトまた兩人とかーきこなー有て(菊)ヨシ〳〵やるものでハない男達ハ足がかんじんだナ呑込ざ〳〵(團)アレ〳〵向ふへ風吹烏客めらゞくるハ〳〵(菊)うまやまたなんの事じやトずがゞきに成り兩人床几よりこり居る袋へ腮病口より思ひ〳〵の客一人づゝ四五人出て來る團十郎菊五郎せりふあつて此客を一人づゝ刀をぬいて改ためる事よろ〳〵トゞ股を潜れといふ客よぎゐく股をくゞる菊五郎客のあたまを股へ狹みぐる〳〵と廻り突飛さるゝ客ハ向ふへと入る始終すかゞきよて菊五郎思入有て下座の方と見て(菊)ヲヽ向ふへ揚巻がくるハ〳〵(團)アノ女郎と身あがりで居るのら來いといつてよこしたが見をバ客を送るていこいつア一番いいざアあるまい(菊)ううだ〳〵いつてやれ〳〵ト無せうよ騒ぐ腮病口より滿江の(仲藏)へ一文字の編笠をうぶせ羽織大小の形よて揚巻の(半四郎)その手を肩あうけて出て來り(半四郎)お前ハもふ歸らしやんすかへお前よ別をるが名殘とーひまいるアト是よて仲藏うなづく舞臺ハ中程よく團十郎半四郎を引退る菊五郎此内天秤棒を腰ゐさし半四郎を捕へまきんでゐる團十郎ハ仲藏の前へ立塞がる仲藏通り違ひよわざと團十郎の足を蹈團十郎仲藏の刀のこじりを持て(團)さむらひまちやれ(菊)留ろ〳〵をつとめろ(半)助六さん鹿相さんすナ(團)ふびやアがれ寶女郎(半)あくたいいいんにナ(團)いつたら堂するいつたら大事か(菊)そうだ〳〵いつたら大事かいつたら大事の興吉ゞ女房けがないく〳〵とホヽこれだ(團)侍ひ此廣い狙來をナゼ足をふんだ足袋がよでれた鼻紙とだしてふいてゆきやれ(菊)ふうせろ〳〵今ふかざアふきゐゝまい(半)コレ鹿相いふて跡でゐやまらしやんすゐへ(團)うぬが知つた事じやアねへ默止ていやアがれ(半)アノ憎らーひ顏わいナア(團)へこうぬふやアはいぬか侍なせものを言ねへふきやれナ但し鼻か(菊)のッぺら坊ゞ物をいへ(團)コレ物をいへ第一人のまへゝ慮外だ此道具をとれ(菊)與次郎兵衛をぬがてつゞきをゐめさせろやい(團)己がまへで慮外だわれが脱ざア己がぬゞーてやらう此道具をとれやいト團十郎仲藏の編笠ど取る顏見合せかどろくこゐー半四郎思入あつて(半)サア助六さん笠をとつてお顏をみやゐやんーたち存分よさんせひよつとふ顏へ疵でもついたらどふーやうと思ハんすそト是よを團十郎ゐりこ〳〵と云われる菊五郎思入あつて(菊)どうだナ〳〵祭りが支へたナ己が出やうドリヤ〳〵〇ト菊五郎團十郎と入替り團十郎菊五郎ゞ袖を引きよせといふ思入菊五郎是よ心付ずよわいナ〳〵打捨つて置つしやい〳〵能ハナ〳〵是此足と見ろことも愚かや揚巻れ助六ゞ兄分襟巻のぬけ六といふ者だとりやこつちらの足が住吉の反足だこちらの足ゞ難波のわーゐ思ひハ仙臺河岸の〇アヽ男達といふ物ゐいたいものじや痛い所と辛抱ーて見たゞぬけば玉散るてんびんバう坊樣山道やぶれた衣ころも愚かや揚巻のまへだち白酒の糟兵衛といふ物家よ停いる握りこぶーの榮螺のら汝が目のあひだと〇ト仲藏が顏を見く惚りー狼狽く花道へよげもきアここと己ゐ死んだト俯伏ゐなる仲藏思入あつく(仲)揚巻の助六とやらよい身持でござるれ袋へでざれ袋へでざれ〇ト仲藏團十郎を下へ引すへサア存分ゐさつしやゐ母ゞ存分よ成り舛るサアぶたぬか踏ぬゥエ〳〵情けない是程でハ有まいと思ふたが余よりのまとで腹も立ぬゐいのエヽそなたハナアト胸づくーをとりよろしく

愁ひのこなー(團十郎)面目おさこなーよて(團)モシ〳〵母
人これよい段々ェ、開へた母ぎや人を今の様ょ拵へたい
こりャァ我だナ(半)何のわたしゞ知らふぞいナァ(團)シ
テ誰ゞ思ひ付だ(半)アノお袋さまがお前のけんくわの噂
とお聞なされてたいとしや夜の日もれ休をなさをぬとい
ナァどふぎて其様な心ょなつて下さんーたナァ(仲)こり
ャ〳〵揚巻どの何もいふて下さるナ私も何もいひませぬ
大切れ願ひのある身で此様ナ身持此編笠をゐんとゞすつ
ぱじや夫が武士の悴の詞かれはりょそゐた割りの心から
でい有まい勘ぞ人がおらう朱に交れば赤くおると白酒
の糟兵衛どのとやらよふ大事の悴を此様ナ悪者よーてく
だされょ禮を言舛ふ〇ト仲藏立腹る此せまふの内菊五郎
頭巾をすつぽり冠りそろ〳〵花道へとつて逃てもく此足
を仲藏とらへてどこへでざる袋へでざれ〇ト本ぶたれへ
連て來たる菊五郎ほとびさりょ逃やうとそるを仲藏無理
お頭巾をとりャそゐたい祐成じやゐいか(菊)イャ祐成や
ら雷ぞやら知をませぬ(仲)エ、そゐさとナァ〳〵(菊)エ
、穴へでも這入たふでざぞ舛ゐ(仲)兄弟共ょ打揃ふてこ
れ有さまいナァ〇ト泣落す合方にあり(仲)モシ河津様お
免ぎなされてくだされ舛お前の無念のは最期たのれやを
兄弟の子供成人の後敵を討そふと女子の身の恥かしい貞
女をやぶつて祐信殿へ縋組その甲斐ものふ兄弟ゞ此行跡
所詮此通りでい敵いうをますまいといふて今更祐信殿
になんと言譯いとふ此様に兄弟を育てあげたい滿江が因
果此世の祐信どの未來の河津どのへの云譯いてをゞ河津
殿の墓のまへゝいて自害して死ぬるそうじや〇ト仲藏思
入わつて行ふとするを半四郎團十郎菊五郎三人よて留る
エ、放せ〳〵死ぬる〳〵(菊)マァとお待なされませ私じ
やとゆて何ぎょ今の様ナ心ででざりませうコレ時致今の
譯をおとなぎゆーやいの(團)母人さま此時致が喧嘩さだ
めて不所存者ともればしめーませうゞ全くもつて左様で
とでざぞ舛ぬ當表箱根ょ於て友切丸の紛失それゆゑ袋ゑ

祐信殿のは難儀あなたのは難儀を見捨てい敵もうたをず
何卒ぎて友切丸を詮議のた先と此廓へ入込喧嘩をしゃけ
刀をぬかねばならぬ様に無理難題のあくたいつくも是皆
友切丸せんぎのためまつたく染曜に致すけんくわでいて
ざりませぬお疑がひとお晴ーなされて下さりませト團十
郎菊五郎よろーく詫る仲藏思入あつく(仲)スリャけんく
わい慰さみでとのふて友切丸詮議ゆへじやとか(菊)左様
よでざり舛る(團)は機嫌をお癒ぎおされて下さり舛せ
(仲)成程義理ある祐信さまの難儀を見捨てよもや敵もう
されまい友切丸せんぎの爲と成程尤じや疑がひいはを
た若ャそゐたの身ふひよつとした事が有てい願と叶いぬ
程ょ大事ょ詮議ーやゝ(團)左様なればお疑ひい晴舛たか

○毛抜

該狂言ハ寛保二壬戌年の春大坂佐渡島長五郎座よて二代目海老藏「鳴神上人北山櫻」ょ鳴神上人と粂寺彈正の二役をつとむ(案るょ粂寺彈正といふ役名ょ元祖才牛ょ是ゆり但ー是を毛抜の狂言の初とするか猶考ふべし

扨此毛ぬきといふ狂言を聞くに今をさること四十余年の昔し今の團十郎が父海老藏此粂寺彈正を武藏坊辨慶ょてつとめし事ありといふいつたい毛抜といふお家狂言も隨分古風のものゆりと見へ書おろゐの儘ょい勤めぬと見へ種々の役名ょ書換て勤ゑしものと見へたり今其狂言のあらましをいふょ辨慶がぶたい眞中よて大毛抜ょて髭をぬけゐるは殿場あり然るょ此は殿の姫君物の怪の祟りゆや病床よわつて自分の黒髪ゞ自然とつゝたちて天井へうしろがみと引るゝ病氣ゆて晝夜の苦患ふ祈禱なぞそれゞ更ょその功驗なきょ忠義は家來い心配して變化を顯いさんとする然るょ辨慶ど不審は思ひ何ぞもこれど諜反人が仕業ょ違ひなしと諜計を思ひつき大毛抜もて姫君の寢所間近きところよて我が髭をぬいて居るドロ〳〵の鳴物にて此毛抜自然と動きいだす

辨慶（海老藏）扨こそ怪しき此天井いで正体を顯さ玄呉んと立かゝると天井の忍びのもの武藏坊が勇氣に恐れ黒裝束よて天井より落來る辨慶これと捕へ拷問ーて白狀さする（忍びのもの）今ゝ何をう包まん此ゞ殿の天井よ兼て大きな磁石を仕かけおき姫君の黒髪へ鉄粉をふりのけ其磁石とさーつける時ゝ忽ち髪の毛逆だつやうの謀計あり ト白狀そる（辨慶）扨こそ〳〵此武藏坊も左こそと悟りーもゑ此毛扱よて髭をぬけ玄に果して自然と動きいだせーゝ磁石のはたらきたくんだり計りたり此上ゝ姫君のゞ病氣も物怪のためあらず惡人原がお家よ仇をなさんとする磁石の謀計イヲ此上と誰人よ頼まれーゝ尋常ふはくじやう致せたつて陳ずる上のらと此辨慶が三井寺の釣鐘を引あげー强力にて掴みころゞそ誰だと思ふァゝつがもねへト足下よりけてたつと見へ此時謀反人の敵役白狀さをてと身の上と大勢の家來よ官付扱刄よて辨慶をとりまき動くゑ（辨）エゝ小ざのー

弱虫めらィデ辨慶が手あみと見せんト是ゞ大勢を相手よ立廻る此内大ぜいれ刀鉄ゆゑ天井の磁石よ吸つかれて皆〳〵の刀日覆へすひとらをる辨慶是を見て笑ふ

皆々恟り是よてよろーく幕

右古老芝居好の人のとなーと記憶のまゝ記せり

（以下助六の續き）

たが有がたい（仲）揚巻どのこな樣のお世話で喧嘩のやうすとやうすと聞て就付まーたが時致友切丸詮議ゝた先そあたの身よ怪我のないやう守りを遣りませうト着て居る紙子をぬいで出ー〇コレ此紙子を其方よやふう手荒ふすると破をるぞゞの樣な口惜いこともじつと堪忍玄て紙子の破をぬやう若し短氣と起せバ紙子がやぶれる是をやぶると母の身へ疵と付るも同前じやそト 思入あつて件の紙子とやる（菊）いかさま是ゝよい堪忍の守ゞサア弟早速着かへやト是よて團十郎こなし有て上着をぬぎ此紙子をきる此内菊五郎ゝ仲藏ゞいつたせゞふを操返ー捨ぜりふにいふ團十郎帶をゞる〇ヨ、能く似合た（團）早そくお志しの紙子着致ーまーてござり舛る（仲）ヲ、若い身ゞゝとつらーく思ゝふが毋じやと思ふて大事よーや祐成これで落付たもふ歸らうでゝあるまいう（菊）左樣ゑれゞ私ーがお供いたーませう助六もとじや（仲）イヤ何揚巻どれ先程から段々とのお世話そのれ禮よ今宵ゝ助六ゝこなたよ預けまゝた夜が明たら早ふ歸ーて下されや（團）成程わたくしが跡ゑ殘りチト心當りゞござり舛をゞ夫を詮議いたー跡より歸り舛るでござりませう（仲）うんゑら助六揚巻どの祐成とじやト行ふとする菊五郎草履をゑやー杖をもつて來る半四郎打のけをぬぎ仲藏と留ゞ（半）いかう夜寒ゑなりまーたゑ風でも召まーてゝト思入あつて〇是ゝむさうとござり舛るが私ーが小袖夜風をーのゞ爲ゑめーなされて下さりませいト仲藏菊五郎と顔見合せこなしあつて（仲）うんゑら揚巻どのト小袖ともち〇うたゞけのふゞざる（菊）助六（皆々）さらゞと三重よて仲藏先よ菊五郎行

のけ(菊)早く歸りやをよト言あがら兩人向ふへと入る跡合方よ成ん半四郎兩人と見送り(半)ウならずお氣づかひあされ舛るな喧嘩いさせ舛ることじやてざりませぬ程よ今宵いゆつくりお寐みなされ舛せいねゥんに苦勞なさるヨいナ○助六さんチトたしなまーやんせ現在のおかゝさんと見逃へるといふ事ゲ有るものゥいナァ(團)馬鹿アいへお袋ゐ編笠と着せく大小をさゝせて出たものを古鉄買ゐ見せくも母じや人とどう見へるものだ揚巻よく天井と見せたナ(半)お前よなんぼ喧嘩を止さんせと私ーがいぶても聞ぬゆゑお袋さまのお出なされた位幸ひにわの樣わ拵らへたれば待ひまでよ邂逅をとれといたヨい助六さんちつとさうもてざんすまい(團)なんだてざんすまい此方むこアがれ(半)こりャどふさんす(團)どふぞる物だアゝ聞へた毋者人をアノ樣よ拵らへたい助六を困らしく此廓へこられぬ樣よーたのか袋ナうそ付女郎め(半)あんじやうそつきじや何がうそおや(團)是ヤィ知るまいと思ゥ己アあの髭の意休と寐たナァノ親仁ゲ襟元よついて夫でれれを足留しやうと思つて今の樣わーたナ袋ナ狐女郎狸ぢようろ畜生め(半)なんじや私ーゲ意休と寐たとへこりャをこのーいわいナぼんゐ寐耳よ水でてざんすわいナ(團)よふ寐耳よ水でわふうアノ髭の親仁がむーやくーやとーた所がうぬが寐さとんだ所へといつたかも知をねへわいい(半)イャ云ーて置ゞあんまりじやわいナわしゲ意休と寐たといふ事雖に聞ーやんーた云た人が有うどまで聞んゑた(團)どこぞゝも聞たわへ(半)イャく何所で聞たのじや(團)サァ耳で聞いた(半)耳で聞さへ耳で聞たら云人があらう云人を袋へ出ーや(團)云人がわるゝ(半)其云人ゝ(團)サァ云人ゝ(半)そのいひてゝ(團)ねへ(半)ソレ見やしやんせ何の証據もないことを聞へぬぞへ助六さん兩度も二人ねて話すにゝ譬へ裾を肩へ結んでなりともお樣樣を養ないませうといふたれゞぼんよそなたれ樣な眞實ゐものゝおい一生忘をぬゥたじけないと云つさじやないか

(團)そういつた(半)そういつたのが嘘のいナ〳〵コレ私じやといふて腹ゥらの女郎でわるいいナぼんよもう神さん掛て意休い否でおらぬものを夫よ今の樣な疑ゲひあんまりおや○ァゝ聞へたお前わたゑよ倦さんゑたゐ今更切るにきれらをずせう事なーよ意休が事を云ゑやんすい私と縁を切う爲かへコレ助六さんそんゐらさうとゐぜ物を奇麗よ言んせぬぞへ又私ーもお前よ倦らをてうら斬してと居ることもてざんせぬお前が嫌ならわたーもいやでてざんすが助六さんそうとせぬ物おやそりやお前きたゐいー樣おや〳〵(團)そう聞ゞあんまり無理もねへ疑ひ晴たこちら向けト半四郎ハばて盃を拵下手へ來り(半)畜生めよお搗ひなされて下さと舛な(團)ハテ己がこういふゥら湯そんなよ腹をたつことといねへ意休とわけのない事ゐらばト又せりふの内半四郎ハッンとーて此方へ來る(半)嘘付女郎よおかまひおさをますナ(團)是いとふざ己も人よなんの彼と云れたよ依て意休が事をいつたのだいゝ加減よ堪忍ーろならねへこの置やァがをおれが先刻から甘口よいやァ付上りがしてモウ歸るぞと先るな〳〵歸る〳〵ト思入わつて○ぼんよ歸るぞ留ねへかとめるナ〳〵なんの事ださらゞ歸りよせうト思入よく歸らうとする半四郎ちよつと留る(半)何おやゝらぼんゐ此樣ことをいへゞ米練らーうく悪いけれど是計ゥりゝいとよやゐらぬ下よ居や(團)下ゐねらァ(半)コレけふこなさんがさーてざんした杏葉牡丹れ紋のついた傘ゝどこれ女郎衆から貰ゝーやんーた(團)われかれゝ茅場町を誂らへた(半)だまりャ(團)ヲットだまつた(半)人が知るまいと思ふてよふ知つてゐるわいナァ(團)れぬしえナぞそんな野暮なことゲいふへ(半)アイ私しや野暮さやばおやよつてれ前よあきらをたわいナ(團)そのやうよ何も云ことえねへそんなら皆な己が悪のつたあやまつたく〳〵(半)そんなら先刻にからのことゝ悪いと思ふて誤まらゞやんすか(團)大あやまり〳〵(半)ぼんよあやまつたのゥ(團)大誓問

(半)わやまつたのが情あらばもちつとこちへよりや(團)よらねへで堂する物かよるいこうよつたが堂する(半)サア、よふ寄やつたあんまり悪いよ依てうらそるわいのト半四郎團十郎の膝へれる(團)れれいまた斯そるわへト引寄せる(半)先刻わから何の彼とエ、よくらーい(團)エ、可愛らーい(半)なんの事ッちやいナアト抱付(團)かわいの物やナかわいのものヤナト此時奥よていぜん(の)憙休の(左團次)揚巻〳〵トよぶ兩人心付(團)ヤアヤ憙休の聲(半)コレ紙子と忘まいそト半四郎團十郎を無理ようちりけの下へ忍ばせて床扒へ腰と掛る(左)揚巻〳〵トいひながら憙休れ(左團次)出て禿兩人香爐臺ともちて付て出る(左)サ、揚巻爰よ居たか(半)アイ憙休さんでござんすの(左)そあたと先刻から尋ねて居た是さつきよ奥でゝふた通ア日頃の事を水にそて此憙休と抱ア寝よふといつたがやんとのことゝ(半)あんの寝るものじやそいナア(左)寝ぬものとい(半)お前とサア寝と言たい啞おや○トこるし有て氣ア替○ござんせんわいナア(左)そんなら寝やうサアを宏や(半)行きやせぬ(左)もかぬとい(半)サア私ーやナ餘まり酔たわよつて風に吹れてゆきやんす憙休さんおまへこそお年寄れ夜風はきつい身の毒早ふねてねていさんせぬかへ(左)いんわや其方が爰で風わ吹れるなら己も爰よ居やうコウ並んだ所をアノ助六の貧乏神野郎が見さらさそ氣をもむであらうノウ揚巻○ト半四郎に寄そふ下ゟ團十郎左團次ゟ足の毛とぬく○アヽイタ〳〵〳〵誰かそれが足の毛をぬいた(半)なんじやお前の足の毛をぬひたへほんよ悪い事計ゟと○又子供か〳〵悪戯ぢやんナ(禿)イヘ〳〵私しらじやござんせぬたつた今お前の裾ゟら(半)又盲分か言分しやんナ(禿)いひとけじやござんせぬ唯さ今お前の裾ゟら(半)獣らぬか憙休さん見やーやんせ子供といふものゝ言譯バかりするわいナ(左)ほんにいたづら計ゟ去て憎いやつらだ己が肩でも揉でくを(禿兩人)アイここここ(左)時よ揚巻いよ〳〵助六が事ゝ止よするかどふか己ゝだまされる樣で氣味が悪いト團十郎出やうとそる(半)出やいそ〳〵(左)何ゞ出まいそ(半)サア出まい○でゝてざんせぬ出たといふ事(左)何ゞ出たといふれだ(半)アレ〳〵〳〵お月さんが出たといふてとイナア(左)何を言今夜ゝ暗だ(半)イヘ〳〵夫でも確のほんよ折角面白ふ晴た月を雲が隠ーたわいナア(左)成程雲が(半)月を(左半)隠ーてハヽヽヽ(左)雲めゝ月を隠さたナ月よ村雲花よ風○ト烟草を呑ふとするたばこ盆を團十郎引たくつて煙草を飲でゐる○アレ煙艸盆があつちへ歩行ていやさ(半)是ゝーたと又子供のいナア奥へとじや(禿)アイここここト禿二人奥へと入る(左)いんよや今のゝ子供じやアあいそよ憎かよト寄ふとするを(半)是どしさりあを〳〵憙休さん何とヤアたんとあるお星さんおやあへかへ(左)珍ーそふに毎晩出る星が堂さた(半)イヽエ餘まり澤山あるさゝいアノお星さんを幾個あるかお前算へて見さんせんかへ(左)なんだ己よ星を算ろ(半)アイ(左)己ゞ星をかそへる内お主やア己が鼻毛を算へるゝこのそへ樣〳〵アレ此方の方に能く光るのが夜中の明星爰のうへよ有るのが七曜とんげアレ〳〵今飛だ星のわけを知つてゐるゝ(半)イヽエ(左)あをい夜這星だ人の揚てをく女郎と盗みに來る夜這星ともてれん星ともいふおんば七夕めよ逢ふ〳〵と思ふても憙休といふ天の川ゞとつかりと据ッて居ちやア逢ふことい成まいノウ揚巻○ト團十郎また足の毛を抜○アイタイ〳〵又足の毛をぬいたやアがつたぞいつだ〳〵(半)また子供らいナア(左)何をいふ子供い爰よ居やアしねへ憎か我が裾のら(半)先つそうナ堂ーで私ーゞ裾から大方子供でゐくバヨヽソレ〳〵鼠じやわいナア(左)何だ鼠おや(半)アイ(左)成程鼠だ〳〵土泥と走るどぶ鼠が揚巻とそれ〳〵(半)エヽ氣味の悪いどこゐナア(左)其處よよ爰よ居るわへト團十郎を引出す半四郎中へ這入(團)憙休か(左)助六ウト兩人思入(左)揚巻といふ辻傾城の裾よ助六といふ土腐ねづをかしやつがゞんで居る事

と意休といふ逸物の猫が髭松明て白眼でおいた助六ナゼ盗みをするろん＋根生で大望成就するものか爰ナ時致の腰ぬけめ(圖)まて意休某しが本名を知り腰抜とい時致が何ゞこしぬけだ(左)腰抜でゐるまいか父祐安ゞ無念の最期其仇を報わんと思ふ心もおく傾城ゑ本心を乱せしうつけものこゝゃ敵左衛門祐經ハ鎌倉山ゑ礎堅く時允く大名ア、聞へた所詮叶ハぬと思ひ色と酒とゑ身を崩すか譬へ其身ハ不器量たりともなど念力の届きなバ大望なゐ空ま からんや兄弟放れ〳〵まして敵ゞ討をやうかゝたきを討ぬバ腰抜武士意休が情けの教訓の扇魂しひを入なはせ武士ゐなれ爰ナ時致のひきやう者めがト扇ゑく散〳〵ゐうつ圖十郎其手を取て(圖)意休わりゃアわやかり物だ汝が今中ゑ通り我々兄弟十八年付ねらへど今もつて敵も討れず夫に引替此助六ハそちが爲ゑハ懇の敵其敵を眼前に扇ゐて打敵を討とハうちやましひあやうりたい我に教訓の扇と言所れ紙子に手向ひあらぬ此時致郷たゝけぶつてと

らだゑいるゐらバ幾等もぶてゑ髭の意休(半)よゝ了簡して下さんまた(左)ゑゥ毋の紙子を毋と思ひ大切ゑゐすゥらハ孝行の志ゝゞゐいでもないそちゑハ何ぞ譬へて○幸ひ〳〵○ト合方ゑ成り香爐臺を出まて○こりゃ時致大望ある物ハ人の恨みを受ず人の情をうけぬバ願ひハ叶とぬ此遊所へ入込喧嘩口論ままかの時なんれ益ゑとへて言バ此香爐臺此三ッ足ハ曾我兄弟祐俊祐成時致と三人兄弟合体ゑてまつこの如く力と合すものならバ祐經ハ愚ゥ祖父伊東が敵たる頼朝どれも討るそそちたちが心頼朝殿を恨みる所存もゐるゐらバ年寄たをゞも此意休まさかれ時ハ共々ゑ力にゐつて得させまいものでもゐい此香爐臺の如く兄弟こゝろを合体ゐさバ百斤の鼎を置とも倒れず崩れずまた兄弟心もとなれ〳〵ゑなる時ハまつこの如く○ト刀をぬき香爐臺を二ッに切る此時圖十郎手早く刀の寸を取見る左圖次振放して刀をゝやんと納め○倒れるそよ廓通ひなやめゑまて人ゑおを〳〵○ト扇ゐてたゝく半四

郎こなーゐる○人多き人の中ゑも人ぞなき人になれ人ひとゑなせ人ひと目を忍んで時節を侍助六さらバト唄ゑ成り左圖次思入ゐつて奥へと入る此内半四郎いろ〳〵有て圖十郎を見て(半)助六さん紙子が破れたわいナ(圖)何紙子が破れたホことホイ此紙子を破るまいとじつと無念を堪へたが此紙子ゞ斯やぶをてハモウ堪忍がゐらぬわ(半)コレ必らず短氣を出すまいぞ(圖)揚巻今教訓の折柄思ハず香爐臺を切割たる意休が一ト腰こりやさゝー く尋ぬる(半)友切丸ゐへ(圖)こりゃ聲ゞ高いト半四郎と引よせさゝやく(半)そんゐら今宵(圖)こりゃ(半)でざんせト圖十郎花道へいつさんゐと入る半四郎思入有て暖簾口へと入時の鐘ゑゐをれをんゞとつて大戸をたてる此潜より客の仕出ー是をいぜんの遺手(丸童)若いーゆ付て出て捨ぜりふ有て向ふへと入る此内圖十郎拵らへ出來て向ふより圖十郎甲斐〳〵ーき形ゑて伺ひ出本ぶたいへ來て影と

○鎌髭

第五楽の圖を下に出す

（助六のつゞき）

うくすと潛より（若いもの）挑灯をともし出る跡ゟ意休の（左團次）深編笠ゑて出る是と一所ゑ朝顔仙平の（松助）と じゑいぜんの新造若いもの丸童おそつれて出て（若いもの）意休さん今宵わ お早いお歸りでござり舛る（丸）毎夜〳〵でざんしてもいつも名代で氣の毒でござんす（新造皆々）また此頃ゑてざんせへ（左）夜が明るとすぐゑ來るわへ皆歸れ〳〵（若）土手まで送りませう（左）夫ゑい及バぬ歸れ〳〵（若）チモわさり夜深ゆゑ（松助）不用心なといふ事かろりヤ氣遣ひいないお傍ゑい朝顔せん平といふ强物ゞ扣へて居る氣遣ひおーゑ休みやを〳〵（女皆々）そんなら意休さん翌てざんせへさらバへト皆々潛へ はいる（左）仙平何時ぐわらう（松）モウ八ツ半でもてざりませう（左）急げと行ふとする團十郎挑灯を切落に左團次編笠とつて身拵をする三人急度見へ（左）何ものだ聲をもうけず切付たいムウわりヤ盗人だナ（團）盗そくでい無そ（左）そういふ聲い助六身性ナ待伏ひろいだナ（團）イヽヤ身性ぞゑい最前より某ーへ教訓の折香爐臺を切割ゑ一ト腰て そ曾我殿原が難儀となつたる友切丸その一ト腰と詮議のため廓へ入込ー此時致友切丸に心かけるうらい汝も必らず本名あらんサア尋常に名と名乘り一腰と渡せ（左）さいせん情をもつて教訓なせー此意休へ刀向ふ人外兼て汝等兄弟と我ゞ味方と奇ー頼朝を亡ぼー平相國れ跡とむらいんと思ひーゑ斯見顯とされし上ゑ何をか包ゑん如何ゑも意休とい假の名誠い伊賀の平内左衛門（團）扨こそゑ（左）大願成就の其爲ゑ盗み隱せー友切丸たつて渡せとぬかせバ命がゑいそ（團）こゑやくな友切丸を渡せ（左）仙平ぬかるナ（松）心得舛た三人ドッコイト恐び三重蛙の聲にて三人立廻ゑいろ〳〵有てトヾ何れも手負ゑなゑ松助と團十郎仕留るうーろゟ左團次團十郎を一ト刀切る是よりいろ〳〵有てトヾ團十郎左團次を切倒ー友切丸と奪ひあらゑめることと有てどつのりと尻持をつゝ團十郎息の切るこゑー此時下手ゟ若いもの提灯を灯ー鼻唄をうたひ乍ら出て左團次の死骸ゑ爪づき（若）おりヤア意休さまじやト挑灯を差出を團十郎此てうちんを切落す若いものゑげながら（若）切さ〳〵〳〵〳〵ト向ふへ いる是ゟ東西本舞臺ゑて拍子木をうちアリヤ〳〵の聲團十郎東西へ行ふとーて人聲ゑ恐をて天水をけを見て手桶を卸して桶の底をぬき是をのぶり下ゑ据る水こぼれる花道上下の口より（若いー㊥三人）棒をもち出く△人殺しとどこへ逃た〳〵（皆々）とこと探ーても見ねぬ○そんなら家根へ逃とせぬの階子ともつて來い（皆々）合點だト大ぜい出く竹の階子ともつて東の棧敷の家根へかけ是へ若いし㊥上ッて（若）やねゑも居舛ぬ○是かゑ角町河岸をたづねろ△己をい揚屋町とたづねやうト皆々捨せりふゑく三方へと入る始終時の鐘アリヤ〳〵のこゑ團十郎天水をけゟ顔を出すアリヤ〳〵此事二三度あつて解まる團十郎伺ひ出く濡た着類と絞りよろめき乍ら花道へゆかふとする此時口々ゑてアリヤ〳〵れ聲ぞる團十郎氣を失ひ倒れる爰へ口々よりいぜんの○△其外若いー㊥大勢出て團十郎と見付（皆々）爰ゑねた〳〵擲殺せ〳〵ト棒を振あげる爰へいぜんの揚巻の（半四郎）走り出團十郎を裾へ隱し（半）私じやー〳〵鹿相しやるナ揚巻じやそ○てりヤ太夫さん危なふてざり舛（皆々）退ッーやい〳〵（半）コレ〳〵私や先刻ゟら爰ゑいた其人と切たものいあつちへ行たゆいのふ△イヱ〳〵お前の裾ゑね舛る（皆々）お出しゑさい〳〵（半）イヱ〳〵爰ゑい居ぬゆいナア（皆々）夫でもたつた今見付た退ッーやい〳〵（半）待や〳〵そんなら此揚巻が唾を吐くと思やるのうそつく樣ゑ女郎じやゑいそへそりや何ゑや棒振上て私をぶーやる惡ふ棒三昧ーてりの棒の端がわしゞ身へちよつとでも障ると五丁町い黑闇じやそ（皆々）イヤア（半）サア私が相手ゑゑらう此揚巻を相手ゑーや又是〳〵皆の衆揚巻さんがアヽ言つーやるゑ違ひもあるやい是うら方々手分をーてたづねやう（皆こ）夫が宜らうサアてざを

〜ト皆々捨せりふ有て三方の口へと入る跡半四郎見送りよろ〜くこあー有て團十郎よ氣付を含ませ天水をけの氷を口うつーよ呑せ肌と肌を合せじつと抱ゞる是よて團十郎やう〜〜心ゞ付(半)助六さん心ゞ付舛たか(團)揚巻ゥ少ーのかすりで水よひたつたゆゑゥ氣と失なふた口惜ひ(半)モシそふ云てお前が望みの品ハ手よ入舛たゥ(團)よろこべ友切丸ハ手よ入た(半)そりやお手よ入舛たゥエヽ嬉ーや〜(團)此上ハ一時も早く立退ふろれト行ふとする(半)モシ〜此廓ハ大勢ゞ圍んで居れバ落さんと道とあいわいナア(團)幸ひの此階子家根傳ひわ(半)危あい〜怪我さんとナト團十郎階子の中程へあがる(半)モシそんなら私や西河岸の方へ廻ツて居る田甫のゥうへをりさんせ助六さん(團)揚巻(兩人)さらバトよろしく身支度をする(團)まづ今日ハ是切ト日出度打出ー　(畢)

○闕羽

此狂言ハ元文二丁巳年十一月河原崎座頭見世狂言よ名題ハ「閏月二人景清」第一バん目大詰よ闕羽(海老藏)張飛(團藏)相勤め大當りなりー是を以て初めとす

○江戸客氣團十郎最負(天明九酉年立川焉馬作)よ左のことわり以て證とすべー

(前文畧す)かゝる乱世の時おくびやうものも阿房もおけれバならぬ玄德あらびよ孔明ゞ謀りごとーやとのとね四バんめかけじの關羽の靈像とあゾ青龍刀をもつて荒事もろこしの闕羽もこれ程わいあるまい日本一の役者の開山まつせよいさるまで大評判大當り云々

此狂言ハ寛保二九月大坂よていとまごひの狂言なり如斯あれバ浪華よても古今大あたりせしと見えたり

又享保年中江戸市中よ漆繪大ひよ流行せり此圖よ闕羽の像あゾこを團十郎が勤ゑしと寫ーいだせしものゥ「十八番考豊芥子著」よその漆畫の圖を出せ爰ハ略ゼぬ此後市川家よて絶て闕羽ハつとめぬと見へたり

○解脱

案づるよ寶暦十庚辰年五月市村座大名題「曾我万年柱」第二ばん目「鐘入解脱衣」景清亡魂四代目團十郎相勤めその時の長唄楓江富士田吉次三絃杵屋忠次郎いづれも名人よて大當りなせ云とあゾまた延享元甲子年二月中村座よて「大蛇解脱物語」といふ狂言よ市川海老藏文覺上人よてこれを勤ゑ是時も大當りよてあり則はちこをもつゝ初めとす(十八番考)わ其圖ありし「鐘入解脱衣」長唄うす物の表紙よ畜ハ鳥居にて景清が鐘よはふづへをつき女の振袖を着ゑる圖ありいづれも景清の亡霊なれども例の荒事あるべしまた其時の長唄連名と

長唄、富士田吉次木村源次郎、岡田市十郎三絃杵屋忠次郎、杵屋彌三郎、西川信藏小つゞみ宇野長七、武田忠藏大つゞみ田中佐太郎板元小舟町二丁目伊賀屋勘右衛門とあり因ゑによつて記す

○押戻し

此押戻ーといふ狂言もいづをと以て初めとするや詳らこのあらず俗よ青竹五郎あそいひて鳴神、道成寺其外怨靈の出る狂言よ小手脚あて腹よき大どてら三本太刀裾竹ゲさ高足駄とはき太ゾ青竹をつえわ突き怨靈のあれたるを花道の中ゥとより舞臺へ押もどす荒事すこーのことあを共目ざよーきものよて市川流の外よ勤めるものなー

また草摺引の曾我の五郎朝日奈のごとく引臺といふもれに二人ならび花道と引くこれと引道具といふよー又簑笠なしよ肌ぬぎ武者たすき五枚わらじよて出もあゾ杖ハ右同斷あり扨また次にいだす「雲雀山金雞」といふ名題道中五十三次伊勢恭宮のせりふと書ー本の(せりふ畧す)表紙よ今押もどーといふものよ似たる圖あゾもろわ其圖を左ようつー出せり(以上十八番考)

此圖ハ上よ「道中五十三次伊勢恭宮せりふ」とありて

三舛の紋に市川團十郎とあり板元さうひ町中島屋とあり其當圖ハ簑かさ高足駄よく青竹の葉ささよ歌をかきし式紙たんざくを付たり（此ひゞり山といふ狂言歌舞伎年代記とじめ戯場の書ハ見へずゆゑよ年號等知るよゑなし云々と豐芥子の小書あり

○蛇柳

寶暦十三癸未年五月中村座にて名題「百千鳥大磯通」よ四代目團十郎丹波助太郎よて道化役大あたり後ちよ三勝のまうつり嫉妬れあれ場上るり大隣摩主膳太夫その時の上るり名だいハ「夏柳烏玉川」團十郎高野山蛇柳の仕うち大當り云々とあり

「中古劇場記」よいふ下河邊庄司が娘の亡魂とんりやうよて高野山捻り岩丹波の助太郎といふ馬鹿大あたり云々（以上歌舞伎十八番考）

○嫐

嫐の狂言ハ元祿十二卯年七月十五中日村座大名題「甲賀三郎鬼神退治、一心五界玉」第三ゞん目甲賀三郎市川段十郎（元祖ゑり）岩穴へ落されて五かひ玉を得る此岩屋の内屋敷となり是より段十郎妾と蚊帳の内よて濡の所へ甲賀三郎の本妻（小才次）の嫉妬の一心娘呉竹（子役九藏）ゑ取付をんれうの所作子役よて勤め親段十郎と三人の嫉妬大當ゑなりし（右ハ享保十三巳申年正月板）金の揮よあゝ此書ハ板元通塩町奥村源六近藤清春筆此書よ見ゑたり其後天保八丁酉年三月市村座「裏表櫻彩幕」第二番目大切上るりよ名だいハ

歌舞伎十八番の内

其古事を今爰よ

花雲鐘入月

蝸牛のうとゑり打や角びたい　市川九藏相勤申ゆ

樂るゑ前よいふ金の揮の内元祖才牛甲賀三郎の役をつ

とめ娘呉竹ゐ二代目團十郎いまだ九藏といひし時勤めて評判よこのりしゆゑ七代目海老藏もその古例をもつて前の「花雲鐘入月」を九藏ゐ勤めさせしものと見えたり此九藏い今の九藏の父團藏といひし人なり

○不動

不動尊像の狂言とその初発詳びらかならねど思ふよ元禄十丁巳年五月中村座よ名題「兵根元曾我」これ初めゐらんゝ此時い工藤祐經よ(山中平九郎)曾我の五郎ゐ(元祖市川團十郎)朝日奈三郎よ(中村傳九郎)曾我の祐成よ(村山四郎次)才牛悴市川九藏八歳よて初舞臺なり此狂言に山伏通力坊實い成田山不動尊の化身と勤発り

案ずるゐ此前よ父才牛勤めし事ゐれバこそゐざと悴九藏の子役よ勤めさせしものゐらんゝ左すきバ是より以前必らずなせし事疑ふべからず惜い哉書見なし

其後同十六未年四月森田座よて成田山分身不動の狂言に胎藏界と不動市川團十郎金剛界の不動市川九藏つとむ是顕像の秘藏を一子九藏へ相傳せゑゐりといふ此狂言作者い(三舛屋兵庫)則ち市川段十郎なり

因よいふ元祖段十郎の本國と下總佐倉扇矢村の住人なりゆゑよ成田山新勝寺の不動尊を信心一深く祈りて終よ一子ともふけぬ是二代目團十郎拍延ゐり(幼名九藏)是又成田山へ誓願を發一開運を祈りーよ利益をゐふむり伎藝諸人よ秀でー稀ものとなり俳優の龜鑑とぞゐりけるされば尊前よ奉納せゑ神鏡今ゐありゆゑよ家名も成田屋といふ扨段十郎不動をはじめて勤発ー時眼ぶたせわーく瞎をすへる事能いずよつて不動尊へ祭詣し我眼中の血をそゝぎ一七日誓ひをたてしよ不思議ゐるかゐ誠の尊像よ見紛ふて眼中そぐふしてひとみをすゆる事時とうつを正よ精といふべしいさゝか仕内もなくして見物をよろこバす事妙といふべー是ひとへよ明王の加護ならんとて市川代々尊信をこたる事なし云々

此「成田山分身不動」の狂言本のゐらましを左よ寫す

少將百夜車　蟷螂通小町

成田山分身不動

狂言五番つゞ化仕ル

第一

なさけい強さ　をひの村さめ　和國之王聖　是　そまのまつかぜ

やどい雲非よ　へだてゆく船

はなを乘る　ひわふぎ

第二

ゐら去をまねく　おやうちわ　和國之玄宗　是　ありとらのゆきひら

こひをよする　姿ゐりひら

第三

おもひをよする　体つらゆき　和國之一角　是　おほとものくろぬし

ゐみざを杖よ　おひの去ゞらみ

第四

恨みをつゝむ　うこんがたもと　和國之天鼓　是　大ほとものたきとう

妙ぎあらいも
くうういがふで　和國之文珠　是　とのゝこまち
ちゝひをヨくる
とうよのくらさ

第五

△五ぺんつぎやく附の次第

一紀の貫之　鈴木平吉
一文屋のやもひで　高村又四郎
一物部のさくヨん　春川又八
一舍人の助久竹　花園おぐら
一神主ふゞく　小川助左衛門
一竹の内ぶやうの助　太夫森田勘彌
一ひらさめ　市川竹之助
一ちうおでん行ひら　村山四郎次
一うねめ　高島虎之助
一衣がさ主膳　田來島喜代三郎
一まつうせ　うゝ村重次郎
一まつゝぜ母　きぬへ十郎兵衛
一くヨん白近道　松本半左衛門
一左大弁　ひら山十郎次
一とふるのふとゞ　市川和歌之蒸
一深草のーやうく　多門庄左衛門
一在原のありひら　橋本金作
一あふやゝぺ鬼ずゝ　大とり九郎次
一喜撰法師　金ざは平六
一さる丸太夫　市川助十郎
一おのゝ小まち　荻野澤之蒸
一いもとさてろも　山來島初彌
一大ともの黒主　市川團十郎
一あでーこ　岩井左門
一小のゝよーぎ　宮さき十四郎
一右近の内侍　松本勘太郎
一同めのと夕ぺえ　岩井辰三郎
一大伴のたきとふ　座元坂東又九郎
一黒ぬしの子　ゼゞ木三之助
一淺か山たけもの助　市川若松
一くうかい　市川九藏
一きふてふいよ小町　荻野澤之蒸
一鳥さーまつかぜ　うた村十次郎
一下人とり助　さいおく兵介
一たいぞうかひれふどう　市川團十郎
一こんがうのひのふどう　市川九藏
△押るり太夫　さつさゝ樣外記
　　ワキ　左平太

狂言作者　三舛屋兵庫
太夫　森田勘彌　吋
座元　坂東又九郎

羽歳　正本屋小兵衛板
干時元祿十六年亥の四月吉祥日
但し其續やうと正本いあおり古風過るゆゑ愛ゑ畧す

○外郎賣

享保三年戊戌の春森田座ゐ「若緑勢曾我」うねらう賣のせりふ自作にて早口弁舌瀧のごとし大ひやうばん代々家の藝となれり同十一午ゝ春中村座に「門松四天王此うねらう相勸め大あたりなせゝとなり

案るようねらう賣の姿二度目までいもぐさ賣のごとく鉢おきす其後より淺黄頭巾袖なゝ羽折ゝ七五三かざりゝ海老衣裳ゝい寶盡しのもやうゆゑ今ゝ其すがたなり

又外郎賣の箱の上に少さき箱ありいぜんいこれも

おきや考ふべーその後と助六なゝその狂言の中へ入て勸

然しものと見へたりうのせりふの一二を左に掲ぐ

○歌舞伎十八番狂言の外

○坂田の公平元祖 段十郎 ○奴荒事丹前元祖 段十郎

○君に忠孝仕方浄瑠璃元祖 ○鎧馬 元祖

○文ちう 三代目 相達 ○和藤内 三代目

○三田瀬太郎網五代目 切見世のきやうげん

○曽我の五郎 三代目 中村座星合曽我曽我十番切

○荒五郎茂兵衛 四代目 是迄みな市川家の狂言なるべし

又近年新歌舞伎十八番と稱するものあり

○瀧生ものの名たり 七代目 白猿

○雨の鉢の木 河原崎權十郎勤む今の九代目三殊

○桃山 物語 地獄の加藤清正 九代目 三殊

○吉備大臣支那ものの名たり 九代目 三殊

さていろ〳〵あるべし猶洞たるを拾遺の卷よくとし

〳〵正本のまゝを記すべしまた當時國十郎と肩を並

ぶる五代目尾上菊五郎なをべ梅幸が家に傳いる怪

談のお家狂言正本を記したるものを近々發刊致し候

相變らず評判求めの程偏にねがひ上ます

○ういらう賣せりふ

拙者親方とすれば立合は内に先達て御存知の松のたん〳〵

もてざりませんゆ江戸を立て三十里上がた相州小田原い

の美濃の所を根すぎ被成者物明を左りへ出あされやらん

かんやー虎屋藤右衛門只今でいとの致しあんさいと名

ゆりまを元朝より夫のでもり迄拾手あいたあする此くすす

りの藤ちんは國の廻人うんらうとやもの我朝へ來り帝へ

さん拵いの根りから此藥を薬くひ光から明ゆる脳あを一

粒ずつ〻ゆりの寿命まよりとりの拵すよつで其名をみう

ぎよりとう珍薬と賜いる則文字にいねたべきまずく匂ひ

と苦でどうちんがらとやす只今此藥ごとの外世上まひろ

まり方〳〵ゆ似せがんぴんを出さ イヤ 小田わらのをいた

わらのさん拵わらの歳だわらのをいろ〳〵やせ共平がな

をもつぞう いらうとしるせしい親方ゑんさいがかりもー

やお立合の内よあたみかたうの澤へとうじよお出なさる

〻か又い伊勢へ御参宮の折からと必ず立寄れもとめくだ

さりませふお登りなをべ有りがいれ下りならべ左りのの

たはつぢうが八ッひねおもてが三ッひねぎよくとうづく

りはふよい菊桐の御紋ーやめんわつてけいづたゞーい

藥ぐてざるイヤ さいぜんより家名のをさんべかりやても

御そんをのない方にいーやうをんのこせうまるのみしら

川夜船さらべ一粒たべかけてそのきみやいをお目よりけ

ませう先此藥とりよふよ一粒またの上よのせまーてふく

ないへおさめまするとイヤ どんもいへぬといかんといか

んがをこやかよあつてくうふうのんぞよりきたと口ちう

びりやうをせうするがてとー熊島木のこめんるいのくい

わわせ其外万病そくこうわること神のごとー扨此藥第一

の奇妙よい者たのまわる事がせよてまがとだしでよげる

ひよつとーたがまいり出すとやもたてもたまらぬじやそ

りや〳〵〳〵くまいつて來たいまわつてくるいわ

とやのどさたらあしたよかげさーおんはまの二ッいくち

びるのきやう者うくいてうさいやかよあかさたあはまや

らわれこそとのはもよろをいつすきへぎよへぎは者はし

かみぼんまめはんでめぼんでほうつなたてつみま先つみ

ざんしよーよーやさんのーやそうぜうこゞめのなまがみ

〳〵こんこゞめのこたまがをーゆすひしゆをひち者もち

ん親も嘉兵衛子も嘉兵衛おやかへ子かへ子かへ親かへれ

やかへ子かへふるくゞの水のふるきり口ゆまがつぼかゞ

ん合羽かきさまれたやはんもりわきやはんわをらりきや

はんもかわきやはんしつりはゞかまのーつはころびを三

升はりながよちやとぬてぬてちやとぶんだせかわらなぐ

しこのぜきちくのらよよらいよいくみのらよよらいよひの

らおよの一寸のおこぼとけよおけつまづきやるあはそみ

そにとちよよふろり京の生鹽なら生あま鰹ちよと四五萬

貫めお茶たちよちやたちよちやつとたちよちやさちよ青

竹ちやせんでれ茶ちやこたちやくるいく何がくる高野

の山のれこけらこそう狸百疋箸百膳天目百杯棒ハ百本武具馬具〳〵三ぶぐ〳〵ぐ合せてぶぐ〳〵ぐ六ぶぐぶぐきくきり〳〵三菊きりわわせてきくきりひきくきりひきてみ〳〵ミひきてミ合てひきてみ六ひきてみなのなげきの長なぎ刀ミがあり長刀を向ふれてまがらそゑてまがらかきてまがらゐれこそゆんのまてまがら〳〵ひい〳〵風車おきやがりこぼまこゆんべもこぼーて又こぼまたたゝミゝたぶぼゝちりから〳〵つゞたつぼたぼ〳〵ひだこれちたらまてくをまてもやいてもくれれぬものいてとくてつきうかなへまどらじまいーくまいーもちとらくまどらぎす中まも東寺のらせう門まハいばらきどうじがうでくりこんでうつゐんておむーやるゐの頼光のひざもどさらずふゐきんゐんしいたけさだめてでだんなそゞ切そうめんうどんかぐどんなこゝな子ーぼちまだゐのこーたのこをゆまこをそがこゐらずこじやく〜こもつてこすくてこまこせおつとがてんまやこゝろへたんぼの川さきうあ川程がや戸塚ミはーつて行ゞやいとをすりむくさんりゞゐりか藤澤ひゝつの大いそがーや小いその宿を七ツ起ーて早天そう朝相ーう小田わちとうちん香のくれてざらぬ貴賤群集の花のお江戸は花ういちうあれわの花を見てお心がお和らぎやつといふうぶこはう子ま至る迄此ういらうのは評判は存あいとゝやさまさい〳〵つゞより角だせ棒だせぼう〳〵まいわ濡ぎぬすりゞちゞ〳〵くわら〳〵くゝとゝめとゝづーてゑひとう〳〵今日お出の何も機へ上ねゞならぬ賣らねゞならぬと息せいひつやりとうぼうせゐいれ藥のもとじめやく〜細來もせうちんあゐとホゝうやまつてや

○本紙定價壹部金廿錢

歌舞伎十八番下の巻御届明治十六年一月十一日

芝區芝口三丁目四番地
編輯人　久保田彦作

京橋區南傳馬町一丁目二番地
出板人　林吉藏

歌舞伎十八番
浄愛願の看客に

廣告

該書ハ諸君の浄愛願を蒙り上中之巻出板以來意外續々の注文被仰付上中の巻共追刷仕難有奉厚謝候當下の巻の儀ハ十八番之狂言不殘正本ゝ寫一筋書等ゝ記載仕べく筈の所初めより上中下と相定次發賣仕候ゝ付委く十八番筋書を記載仕ゐて之部數等も相増し候ゝ付當号へハ狂言筋書等を省き考へを記一覽候得ゞ拾遺を出板仕ゐて不殘筋書を細密ゝ記載仕可く必得ゐ浄座候間何卒惡からず浄高覽奉願上ゐ乍然當号へハ十八番狂言繪割丈け不殘差繪を加へ置き筋書ハ拾遺出板之節不相替陸續に高覽の程奉願上候也

明治十六年二月

編者
板元　謹白

室町源氏胡蝶之巻

廿六篇
定價十錢

右當二月出板

府縣長官銘々傳

十六年改正

右當三月出板

一立齋廣重畫
東京

藝妓別品年中行事

錦繪
壹枚物

右ハ當時流行之藝妓柳橋新橋日本橋其外各所之藝妓別品之畫圖ニシテ伊藤專三氏ノ一口評判ヲ頭書ニ記載シ圖畫ニ應シ當時有名之落語家諸氏ノどゞ一ヲ記シゐ得ハ何卒浄高評奉願候

右近ゝ出板

錦繪折本類品々

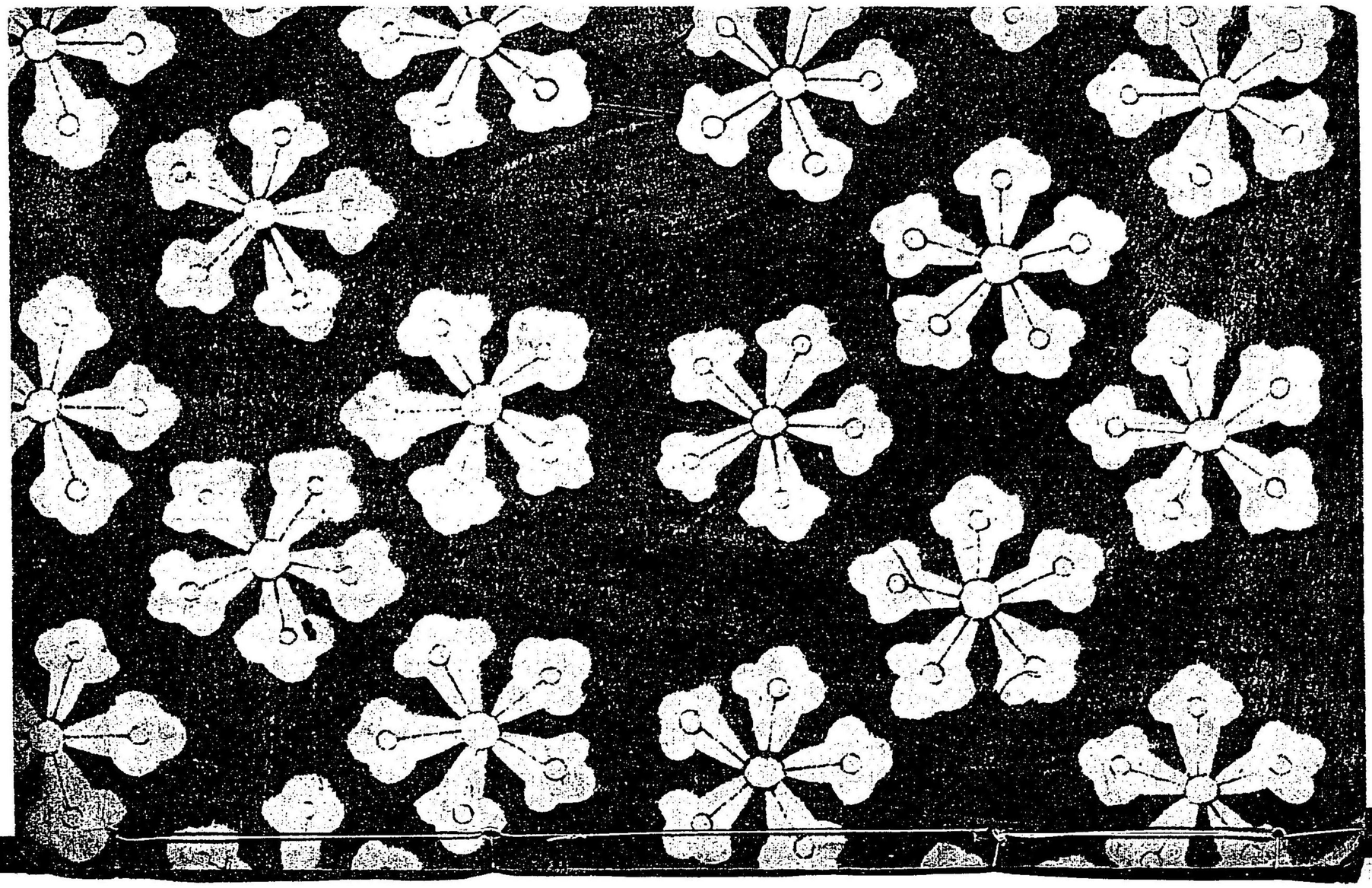
錦繪花鳥盡

壹枚定價
二錢ヅゝ

婦人教訓かゞみ折本

價三拾五錢

岡丈記先生著
文明開化

夢惣兵衛

右ハ當時之夢惣兵衛ニテ俳優國藝妓國商人國其外當今之事ヲ号ヲッギ面白ク記載致近々出板仕候ニ付ゐ高評奉願上候